

農 業 經 営 教 育 方 法 に 関 す る 国 際 会 議 に 出 席 し て

菊 元 富 雄

1. 1964年5月17日より23日まで、京都比叡山ホテルにおいて、農業開発会議 (Agricultural Development Council, New York) の主催で、農業経営教育方法に関する国際会議が開催されて私も出席した。出席者は日本、朝鮮、フィリピン、台湾の四ヶ国 18 大学の教授、助教授 26 名とオブザーバーとして F A O 極東地域事務局のオン博士、フィリピン大学のルタン博士、インドネシア、ボゴール大学のスハルジョ博士の 3 名、それに ADC よりルイス博士およびワイスブラット博士、地元京都大学より菊池助教授、頼助教授ら事務局員数名というメンバーであった。なお京都大学農業簿記研究所の桑原教授（会議出席者でもあり総議長もかねられた）ら所員の方々は、局として多大の努力を払われた。出席者の一人として厚く感謝したい。

会議は 18 日より午前、午後に分けて 23 日の午前まで毎日能率的に熱心に行なわれた。その間、19 日の午後には京大簿記研究所の見学、南禅寺におけるレセプションと京都の観光、22 日には京大で簿記指導している京都近郊の 2 戸の農家の見学、宇治の製茶、琵琶湖の干拓地の見学、大津のスキヤキパーティーなどの行事がはさまれ、出席者相互の親睦感を高めるのに大いに役立った。

2. 会議の議題はあらかじめ連絡され、それぞれの議題について何名かの出席者が冒題報告をすることになっており、報告要旨は会議の始めに出席者に配布された。

会議は議題ごとに冒頭報告が 10 分ほどあった後、出席者全員による自由討論が行なわれた。いくつかの議題について適宜各国出席者より議長が選出された。

議題および報告者は次のようである。

I 農業経営教育の目的について

- a. 大学の学生に農業経営の教育を行なう目的は何か
 - (1) 神崎教授 (京大 日本)
 - (2) J. H. Park (ソウル国立大学 朝鮮)
- b. 農業経営専攻の学生にいかなる関連科目を教授すべきか

- (3) 桑原教授 (京大 日本)
- (4) Z. V. Vilorio (中部ルソン農業大学 フィリピン)
- II 農業経営に関する研究成果をいかに教育に利用すべきか
- (5) E. U. Quintana (フィリピン大学 フィリピン)
- (6) 桜井助教授 (滋賀農業短大 日本)
- III 研究, 教育, 普及機関の相互協力について
- (7) 福田助教授 (岡山大 日本)
- (8) M-N Sung (中興大学 台湾)
- IV 教科書あるいは参考書の利用について
- (9) Y-K Mao (台湾大学 台湾)
- (10) J. H. Park
- V 農村調査をいかに教育に利用すべきか
- (11) M-S Kim (ソウル国立大学 朝鮮)
- (12) Y-K Mao
- VI 学生に研究テーマを課しあるいはレポートを提出せしめることについて
- (13) P-K Lee (チョンナン国立大学 朝鮮)
- (14) P. R. Sandval (フィリピン大学 フィリピン)
- VII 図書館の利用について
- (15) 桃野助教授 (北大 日本)
- (16) T. Y-H Yu (中興大学 台湾)
- VIII 学生に宿題としてどのようなものを課すべきか
- (17) 岩片教授 (九大 日本)
- (18) C-S Koo (高麗大学 朝鮮)
- IX 講義, ゼミナール等について
- a. その内容と指導はいかにあるべきか
- (19) 桑原教授 (京大 日本)
- (20) 篠原教授 (東大 日本)
- (21) F. F. Zablan (ミンダナオ農業大学 フィリピン)
- b. 視聴覚教育について
- (22) 上野助教授 (九大 日本)
- (23) F. F. Zablan
- X 理論の教授について
- a. 農業経営の理論を学生にどのていど勉強させるべきか

- (24) 矢島教授 (北大 日本)
- (25) P. K. Lee
- (26) 金沢教授 (東大 日本)
- b. 農業経営理論の教授をいかに後進的な地域に適用すべきか
- (27) 菊元助教授 (東北大 日本)
- c. インドネシアの水稻作における資本形成について
- (28) A. Soeharjo (ボゴール大学 インドネシア)
- XI 学生は農民についてどのていど学ぶべきか
- (29) 大槻教授 (東京農大 日本)
- (30) 渡辺教授 (酪農大 日本)
- XII 学生は農民に対してどのようなサービスを行なうべきか
- (31) Y-T Wang (台湾国立大学 台湾)
- XIII 学生は農業の経験をどのていど必要とするか
- (32) 岩片教授
- (33) E. U. Quintana
- XIV 大学卒業生および一般農民に対して大学教授はいかに援助すべきか
- (34) M-N Sung
- (35) 池田助教授 (広島農業短大 日本)
- XV 今後農業経営の教育方法および研究成果に関する情報をいかに交換すべきか
- (36) M-S Kim
- (37) P. R. Sandoval
- (38) Y-T Wang

以上のように多数の興味ある議題について討論されたが、私の英会話力不足なため十分理解できないのもあった。幸い、会議後一ヶ月ほどして FAO のオン博士から討論の内容をコピーしたものが送られてきた。これはかなり要領よくまとめられており私も大いに助かった。またルイス博士は終始熱心に討議の内容をメモされ、いづれ何らかの形で発表されるとのことであったので、ここではくわしい内容は省略する。ただ私自身の報告も含めて私に興味をひいた若干の点と私なりの感想をのべるにとどめる。

3. 会議の主題が教育方法に限定されたため、出席者の発言もおのずから限定され、本当に知りたいと思うこと、本当にいいことが十分に討議されないままに終わったように感じられた。もちろん教育方法の技術的問題——例えばカリキュラムの選択、教材の利用方法、教科書や参考書の選定、農村調査の必要性和実施方法、レポートや教室内部のディスカッションの指導、図書館の利用方法、農業経験の必要性等——はわれわれ農業経営を教授するものにとって

重要な興味あるものにちがいない。しかしそれらに関する報告——とくに若い学者たちの——はおおむね空疎であり参考にならなかった。彼らのほとんどは外国——とくにアメリカ——留学の経験者であり、彼の地で修得してきたことをそのままのべたにすぎず、いわば優等生の模範答案をみているような感じがした。たしかにオン博士が指摘されるように、それは彼らがそうしたいという希望の反映であり必ずしもそうしているということではないようである。彼らは外国から帰って自国の農業問題に取りくんだとき、外国で学んだこととの間に余りにも大きいギャップがあることを発見して大いに苦しんだにちがいない。そしてそのギャップを埋めるためにさまざまな努力を重ねてきたにちがいない。それが本当に私のききたいことであったのだ。

4. しかしそれは彼らの責任とはいえない。議題が余りにも技術的に偏っていたのである。それらは農業生産力や農民の生活が一定のレベルに達した後始めて論ぜられるべき問題であろう。しかしそのせまい議論の枠内でも彼らの苦悩はチョコチョコ顔を出さずにはいなかった。

例えば「農業経営教育の目的は何か」という議題で、朝鮮のパク教授は次のようにのべている。

「農民の幸福を支配する数多くの要因のうち農民自身の力でコントロールできるもの——これを農業経営的要因とよぼう——と、農民自身でコントロールできず、それに適応しなければならぬ要因——これを政治的要因とよぼう——の二つに大きく分けることができる。……

農業経営教育の目的は学生をして

- a. 農業に従事する個々人の幸福を増進せしめるという農業経営本来の役割を認識させ、
- b. 農業経営要因を識別させ、
- c. それら原因を農業経営発展のためいかに利用すべきかを学ばせることである。……

しかし農業は地域によって著しく条件が異なる。

農業が産業として十分発達し、農業経営が農民の幸福を増進させる役割を十分達成できると一般に認識されている国々では、経験的（あるいは計量的）な研究は容易に学生に教え得るものである。……

これに反して農業が未発達な国々においては、農業経営が農民の幸福を増進せしめる役割は十分社会に認識されておらず、したがって経験的な研究も質量ともに貧弱たらざるを得ない。そのような条件の下においては、農業経営教育の最も重要な目的は、学生をして農業経営がその国の農業発展に果す戦略的な役割を認識させることである。もし農業経営のこの役割が無視されるなら、いかに正確な農業経営要因の計測も単なるデータのストックにすぎず、いかに精巧な分析要具も知的遊戯にすぎなくなるだろう。……

後進的地域における農業経営教育の目的は、先進国におけるような量的分析要具の教授以上にもっと広範なものでなければならない。……」

この会議の1ヶ月ほど後に朝鮮では学生を中心とする大規模なデモがおこり軍事政権は打倒された。その渦中であってパク教授は何を考えているのであろうか。農業経営の戦略的 (Strategic) 役割という彼の言葉が妙に印象に残った。

5. もう一つ論ぜらるべくして論ぜられなかった問題がある。それは農業経営研究方法に関するものであった。議題としては「農業経営の理論を学生にどのていど勉強させるべきか」がそれに関連するものであったが、これも教育方法に限定されているから理論そのものにまで議論は進展しなかった。出席者はすべて学者であるから、本当はそれが最も興味ある中心課題であつたらう。

しかしここでも理論そのものへの関心はチョクチョク顔を出すのであって、例えば矢島教授は農業経営研究方法を量的分析と質的分析に分け、後者が先行しなければ前者は意味がないとのべられている。また金沢教授は、農業経営は単に国民経済の一部門ではなくて、個別性という独自の性格をもっており、その本質の認識が最も重要であり、分析のテクニックはその認識の上に立って始めて有効なものであるとのべられている。また大槻教授は、日本においては家族経営があくまで主体をなすのであるからそれを発展せしめるような研究方法が最も望ましいとのべられている。

6. これら日本の農業経営学者の見解は出席者一同の共感を得たようであった。しかし私は問題をもう一步進めて、いわゆる量的分析なるものがどのていど後進的地域において有効であり得るのか検討する必要があると思う。「農業経営理論の教授をいかに後進的地域に適用すべきか」という私の報告はそのような問題意識のもとに行なわれたものである。

その要旨は次のようである。

「経済学近年の進歩は多くの分析要具をわれわれに提供した。しかし農業——とくに後進的な地域における農業——はそれらすぐれた武器をうけいれる余地があるのだろうか。

例えば日本の農民は戦前、地主制のもとに高い地代を払わねばならなかった。彼らは終日働らいてその収穫のわずかな部分を手に入れてそれで満足しなければならなかった。したがってそこには農業経営なるものは存在しなかったといつてよい。むしろこれら社会組織をいかに改革すべきかという政策的な問題が重要であった。

戦後農地改革が行なわれて日本の農民は始めて自分の土地を持ち経営者となった。加うるに高度経済成長の結果、労働力が不足し、そこに農業経営原理の必要性が感ぜられてきた。例えば動力耕耘機が導入されその効率が問題とされねばならなくなった。

しかし農業経営の規模は依然小さく、したがって農業経営原理の適用はやはり困難である。反面、学生は農業に直接役立つことの少ない高度な理論と分析テクニックに興味を持ちながら、それがわれわれ教育者の一つの悩みの種となっている。

一例をあげると、リニア・プログラミングはそれ自身きわめて魅力的な武器であつて、農業

経営分析にはかなり有用だと私は考えるが、しかしその基礎データを集めることが後進国では困難であるからどれほど実際に役に立つか疑問である。

同様なことはわれわれになじみの深い限界分析や簿記理論にさえあてはまることである。

このように考えると、学生に高度な理論や分析方法を教えることは無益のようにも思われよう。しかし私はそうは思わない。問題は理論そのものにあるのではなくて、それを現実の農業に適用する仕方にあるのだ。したがって最も重要なことは、農民の現実の姿——社会的、政治的、経済的条件と彼らのそれに対する態度、心情——をよく認識することである。その意味で農村調査は学生に非常に重要なこととなる。

一つの疑いのない事実がある。それは農民は与えられた条件の下で最大限の利益をあげようとしていることであり、したがって彼らはいろいろな作物を選択し、その利益を比較しているということである。彼らは意識するとしないとに拘わらず、代替原理を適用しているのであり、その最も初歩的なものがバゼティングであり、さらにそれが精密化すればリニア・プログラミングになるのである。またそのためにはデータが必要となり、それは当然会計智識を必要とし限界分析の原理も必要とすることになるのである。

結論的にいえば

- (1) まず学生は農民の現実の姿と彼らの「きもち」を十分理解するよう努力すること。
- (2) 農民の「きもち」を忖度しつつ、農業経営理論を学ぶこと。
- (3) そしてこれら理論がどのように農民に役立つのか、したがって何故これら理論が必要であるかを真剣に考えること——これが最も重要なことである。」

私の意見はおそらく私の会話力の不足もあって出席者一同の十分な同意は得られなかったようである。また時間も制限されていた。もっとつっこんだ意見の交換を期待していただけに私は失望した。

7. いろいろ不満足な点があったにせよ、アジア地域の農業経営研究者が一堂に会したということはこれが始めてであったから、それだけでもこの会議は十分有意義であったと思う。とくに朝鮮や台湾の40才以上の人たちは戦前は日本で学んだ人たちであり、日本語で腹藏なく話し合える間柄である。いろいろな行事を通じてこの1週間の会議は、同じアジア人としての親近感を非常に強めた。それだけにこれだけで終らしたくないという考えは出席者一同に強く働いた。最後の議題はそのような問題を検討するためのものであった。

教育方法のみならず研究そのものについての会議を参加国輪番で今後持ちたいという希望、“Farm Management Association of Far East” というような組織を作り、定期刊行物を出版し情報の交換をしたいという希望、交換研究員の制度を作りたいという希望、など出され検討されたが、いずれにせよ先立つものは金である。今度の会議でもADCの資金で始めて可能だったので、日本を含めてアジア諸国は皆貧乏である。

日本は何といってもアジア地域では先進国である。本来ならこの会議は日本が主催すべきものであったのにと、われわれ日本人同志ではよく話し合ったものだ。しかし現実には、われわれ学者は日本国内の学会に行く費用さえことかいているのである。政治家や実業家の手によってアジア諸国の交流をはかることも必要であろう。しかし学者の手によって——とくにアジア住民の大半を占める農民について最も重大な関心を持ち、専門的な知識も持っているわれわれ農業経営研究者の手によって——それがなされればどれほど大きな成果が上るだろう。

7日間の会議を終って私はそのことを痛切に感じたのであった。

最後に参加各国でテキストまたは参考書としてよく利用されている本のリストを参考のためあげておこう（別表、*印はとくによく利用されているもの）。（1965.1）

別表 REFERENCE BOOKS OF FARM MANAGEMENT

Ross and Pond	Modern Farm Management	1651
*Bradford and Johnson	Farm Management Analysis	1953
Black et al.	Farm Management	1951
Case and Johnson	Principles of Farm Management	1953
Castle and Becker	Farm Business Management	1953
Chapman	Efficient Farm Management	1948
De Graff and Haystead	The Business of Farming	1950
*Foster	Farm Organization and Management	1946
*Hart, Bond and Cunningham	Farm Management and Marketing	1942
*Heady an Jensen	Farm Management Economics	1954
Hopkins	Elements of Farm Management	1947
Johnson	Managing a Farm	1946
Robertson and Woods	Farm Business Management	1946
Spillman	Farm Management	1923
Warren	Farm Management	1913
*Efferson	Principles of Farm Management	1953
*Yang	Methods of Farm Management	
	Investigations	1958
Black	Principles of Farm Management	
Beneke	Managing the Farm Business	
Taylor	Outlines of Agricultural Economics	1949
Heady	Economics of Agricultural Production and Resource Use	1952
*Bishop and Toussaint	Introduction to Agricultural Economics	1958
*Hopkins and Heady	Farm Records And Accounting	1957
Pearson and Benneth	Statistical Methods Applied to Agricultural Economics	
Spiegel	Theory and Problems of Statistics	
Ezekil and Fox	Methods of Correlation and Regression Analysis	1959